

## 湿地生態系の文化サービスの指標に関する考察

太田貴大（立命館大学 政策科学部）

様々な制約が存在する中で、多様な対象を適切に評価するため指標が用いられてきた。生態系サービスにおいても、正負の効果や影響の評価、適応的なモニタリングといった文脈で、様々な指標が提案され実用されている(Ecological Indicators, Ecosystem Services 誌参照)。その中で、文化サービスは個別のサービスや価値に分割することが困難なため(Chan et al. 2012)、評価の考え方や手法について様々な提案が行われてきた。本発表では、国際誌の既存研究レビューに基づき、指標化の背景概念や指標作成に必要な事項について、研究蓄積の豊富な景観評価を例に考察する。

Hernández-Morcillo ら(2013)は、42 の既存研究から 70 の文化サービスの指標を抽出した。指標タイプは状態、機能等 5 つに分類し、指標の質は Roche(1999)の SPICED 枠組みに基づき、指標作成の際の 3 段階（概念化段階、算出段階、コミュニケーション段階）各々に項目を設けて得点化している。この研究では、指標が特定されたサービスに偏りがある点、指標タイプの割合がサービス間で異なる点、コミュニケーション段階は充実しているものの概念化段階で明確なサービスの定義や指標特定の根拠が記載されていない点が挙げられた。

景観評価においては、普遍的な美的性質や選好の特徴に関して哲学等で研究が蓄積されてきた(Lothian 1999)。これらの指標化に関しては、個人の経験を重視する主観的視点と景観の物理的構成要素を重視する客観的視点の二つがあるが、指標の組合せや双方の視点を含む複合的な指標が求められている(Jessel 2006)。また、評価対象の要素だけでなく、評価者の多様な属性(Howley 2011)や景観の認識プロセス(Dobbie and Green 2013)も考慮することで、景観の構成要素に基づく指標を補完することが可能となりうる。

文化サービスの評価に大きな影響を与える個人的経験の取り込みは、指標の性質上困難ではあるが、可能な限り情報の損失を抑えた定量化に挑戦するとともに、個人の経験を集団で共有する等、文脈に依存した形での一般化を目指す必要がある(Morçöl, 2012)。

文化サービスの指標は、サービスの動的な変化とそれに対する適応的な対応を前提として、将来世代も含む多様なステークホルダーが目的の達成を評価できるよう構築するものとなりつつある(Daniel 2001)。同時に、これらの指標の移転可能性も継続して追及し、汎用性の高い指標を模索していくことも求められる。